

THE

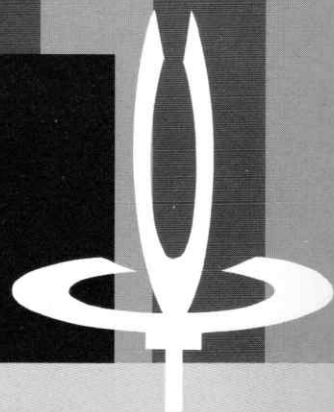


BEAT



AN UDO ARTISTS PRESENTATION 1988

W E S



イエス 日本公演

4月4日 東京 代々木オリンピックプール

主催●文化放送／ウドー音楽事務所

4月7日 東京 代々木オリンピックプール

主催●文化放送／ウドー音楽事務所

4月9日 横浜 横浜文化体育館

主催●ウドー横浜／TVKテレビ

4月10日 名古屋 名古屋市公会堂

主催●中部日本放送

4月12日 大阪 大阪府立体育館

主催●読売テレビ放送／ウドー音楽事務所

4月13日 大阪 大阪府立体育館

主催●読売テレビ放送／ウドー音楽事務所

招聘◆ウドー音楽事務所

協力◆ワーナー・パイオニア

磨きあげられた演奏力と 類い稀なる魅力をもつライブ・バンド

大森庸雄
TUNEO O'MORI

1984年の1月、アルバム『ロンリー・ハート』からのヒット・シングル「ロンリー・ハート」は、全米ヒット・チャートNo.1を記録した。この曲は、日本でも大ヒットとなり、世界的に新しいイエスの見事な復活を告げた。

ジョン・アンダーソンのヴォーカルは、やはりヴォイス・オブ・イエスであり、70年代と同じようにクリス・スクワイアもアラン・ホワイもトニー・ケイもいた。違っていたのはギター・パートであり、スティーヴ・ハウではなく、トレヴァー・ラビンがそこにいた。

トレヴァー・ラビンの参加は、単なるギタリストが代わったという以上の効果をバンドに与えることになった。「ロンリー・ハート」の活気ある音作り、そしてニュー・アルバム、『ビッグ・ジェネレーター』に与えたミュージシャン、プロデューサーとしての影響力も並々ならぬものがある。何しろニュー・アルバムでは、ミキシング、ストリング、アレンジメントまで手がけているのだから。

イエスは、1980年、70年代の栄光のブリティッシュ・プログレッシブ・ロック・バンドとしての歴史を一端閉じた。最後のアルバムは、『ドラマ』。ジョン・アンダーソンもリック・ウェイクマンもいなかった。バグルスのジェフ・ダウンズとトレヴァー・ホーンが新しいイエスの1員となっていた。アルバムは、成功だった。イギリスではNo.1になったし、ツアーも大成功。9月のニューヨーク、マジソン・スクエア・ガーデンのコンサートは、レッド・ツェッペリンの記録を打ち破る新記録を作った。

しかしバンドは長続きしなかった。イエスは、その12年間の歴史を一端閉じたのである。スティーヴ・ハウとジェフ・ダウンズは、エイジアを結成、トレヴァー・ホーンは、プロデューサーとして動き出し、残るクリス・スクワイアとアラン・ホワイは、新しいプロジェクトを練っていた。

クリスとアランは、トレヴァー・ラビンと組んで、シネマという新しいプロジェクトを考えていた。そしてシネマには、最終段階になって、ジョン・アンダーソンが参加をすることになり、彼らはシネマという名前を捨てて、再びイエスを名乗ることになったのである。83年なかばのことだ。

そして「ロンリー・ハート」のビッグ・ヒットと共に再び浮上、ブリティッシュ・プログレという言葉すら知らない新しいファンを多数つかむことになった。今なお

イエスというバンドがその初期から大きな特色としていた強力なヴォーカルと強力なインストゥルメンタルの融合という基本姿勢は、変わらない。しかし、『ビッグ・ジェネレーター』を聴いても分かるように、バンドはただ70年代の古い栄光の中に生きているわけじゃない。

ジョン・アンダーソンのとき澄まされたヴォーカルは、健在であり、サウンドは、カラフルな色彩と十分なエネルギーをもって、聴く者をひきつけてくる。

今年、1988年はイエスの結成から丁度20年目にあたる。その記念すべき年に行なわれる日本公演は、1972年以来、16年ぶりのことだ。

72年というと、「ラウンドアバウト」のシングルと『こわれもの』(FRAGILE)のアルバムをもって、世界的に人気の火がついた年だ。

この年の2月、彼らは、3回目の全米ツアーを行なっているが、この時は、ブラック・サバスのオープニング・アクトだったという。ブラック・サバスとイエスという組みあわせで観客がどんな反応を示したのか、今考えてもあのパッケージは、不思議な組みあわせだった。

この72年を契機に、イエスは、イギリスを代表するスーパー・グループへの道を急速に築きあげていった。1974年の終わりに発表したアルバム『リレイヤー』のあと、1度ファー・イースト・ツアーが計画されたことがあったが、中止になってしまった。その時は、メンバーのソロ・アルバムが相ついで出ているので、イエスとしてはバンド活動に1時期、終止符を打ちかけた時期なのかもしれない。

1968年の結成以来、何回かのメンバー・チェンジをくり返したものの、今なお精力的なレコード作りとツアーを続けている。日本公演に先がけて行なわれた全米ツアーも各地でソールドアウトが相ついでいた。

「ラウンドアバウト」や「アメリカ」、「アンド・ユー・アンド・アイ」といった70年代のイエスを再び見たくて、やってきた人もいだろう。そして当時を知らない「ロンリー・ハート」や「ラヴ・ウィル・ファインド・ア・ウェイ」でファンになった新しいファンには、このバンドの卓越した磨きあげられた演奏力に新たな感動を味わうことになるだろう。レコードだけではない。イエスは、ライブ・バンドとしても類い稀なる魅力を持ったバンドなのだ。

YES-1988 THE BIG TOUR CREDITS JAPAN

JON ANDERSON
TONY KAYE
TREVOR RABIN
CHRIS SQUIRE
ALAN WHITE

SINGER & KEYBOARDS
KEYBOARDS
GUITAR & VOCALS
BASS & VOCALS
DRUMS

MANAGEMENT

TONY DIMITRIADES, ROBERT RICHARDS
AND ALEX SCOTT

TOUR MANAGER
ASSISTANT TOUR MANAGER
BAND ASSISTANT

REX KING
MICKEY HEYES
PAUL SILVEIRA

PRODUCTION MANAGER
LIGHTING DESIGNER
HOUSE SOUND MIXER
MONITOR MIXER
MONITOR TECHNICIAN

ALAN SANTOS
STEVE COHEN
DAVID ROBB
CRAIG MELVIN
GREGG SALMON

DRUM TECHNICIAN
BASS TECHNICIAN
GUITAR TECHNICIAN
KEYBOARD TECHNICIAN
JON ANDERSON ASSISTANT
HEAD TECHNICIAN

NU-NU WHITING
RICHARD DAVIS
DALLAS SCHOO
MICHAEL JAY
RON DE VIVO
DAVID ROBB

LIGHTS BY VARILITES

ACCOUNTING

RICHARD FELDSTEIN
FOR SIEGEL & FELDSTEIN

TOUR COORDINATION

JILL YAMASHIRO

VARILITES

ROBERT GERSHENFELD

PRINCIPAL TOUR BOOK PHOTOGRAPHY
ADDITIONAL PHOTOGRAPHY

GLEN WEXLER, JEFFREY MAYER
MICHAEL DRURY, AARON RAPAPORT,
DAVID P. BJERKE

SPECIAL THANKS

BOB BRADSHAW, D'ADDARIO
DRUM WORKSHOP, DYNACORD
KORG-MARSHALL, LUDWIG DRUMS
OBERHEIM, OVATION
PRO-ROCK, REEK HAVOK
ROTOSOUND, ST. LOUIS MUSIC
TOBIAS, ZILDJIAN CYMBALS

A SPECIAL THANKS TO PATRICK TESSIER FOR THE USE OF HIS PHOTOS IN THE
9012 LIVE ALBUM.



SINGER + KEYBOARDS

*On the silent wings
Of freedom
Where we offer
Ourselves
Midst the balancing
Of the sun*

*On the winds of
Celestial Seasons
That would carry me on
Midst the balance
Of being one*

*On the dream of our
Love Eternal
That will eventually bring
Our living
Once more
With you.*

Jon



JON ANDERSON

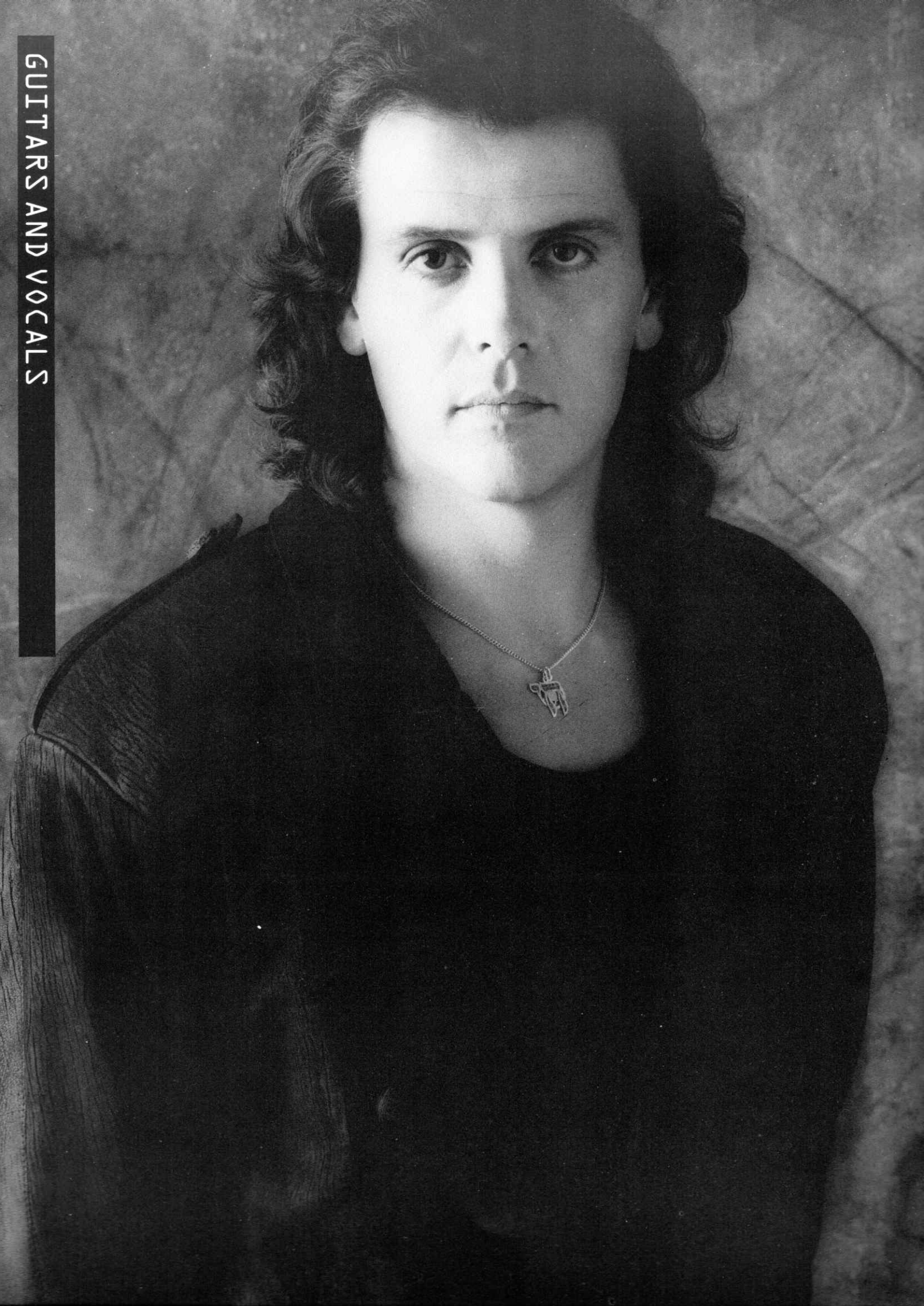
KEYBOARDS

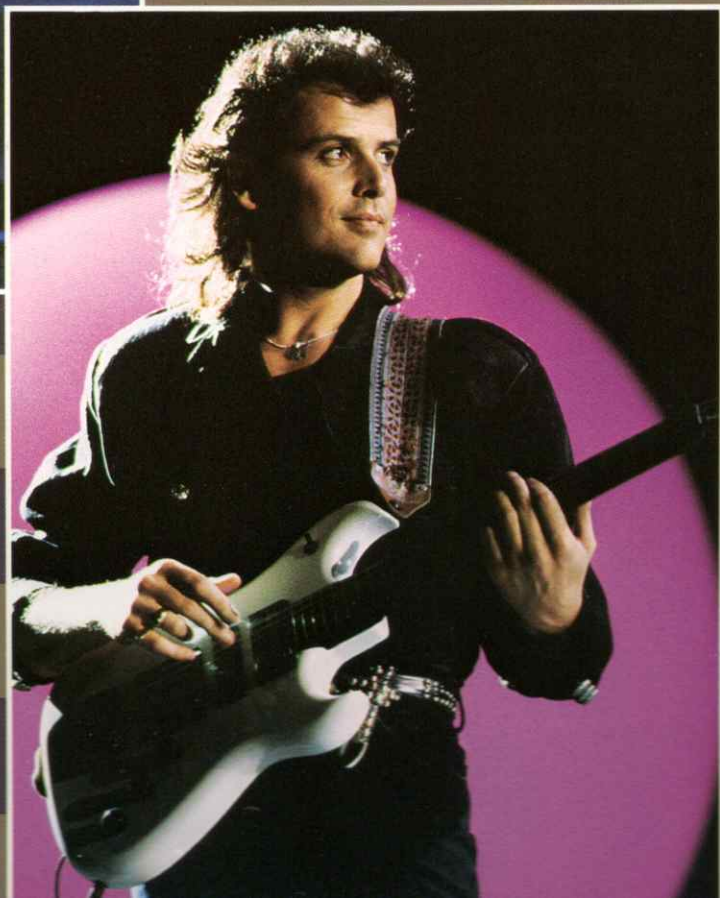




TOMMY KAY

GUITARS AND VOCALS





THE
RE
VO
K
R
A
B
I

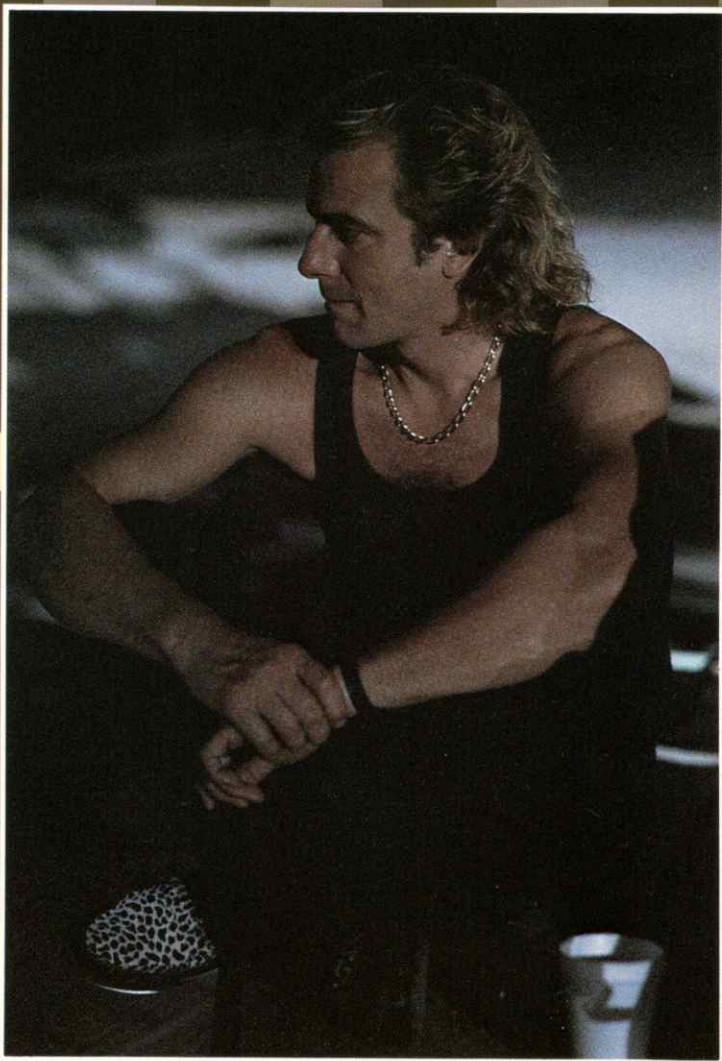
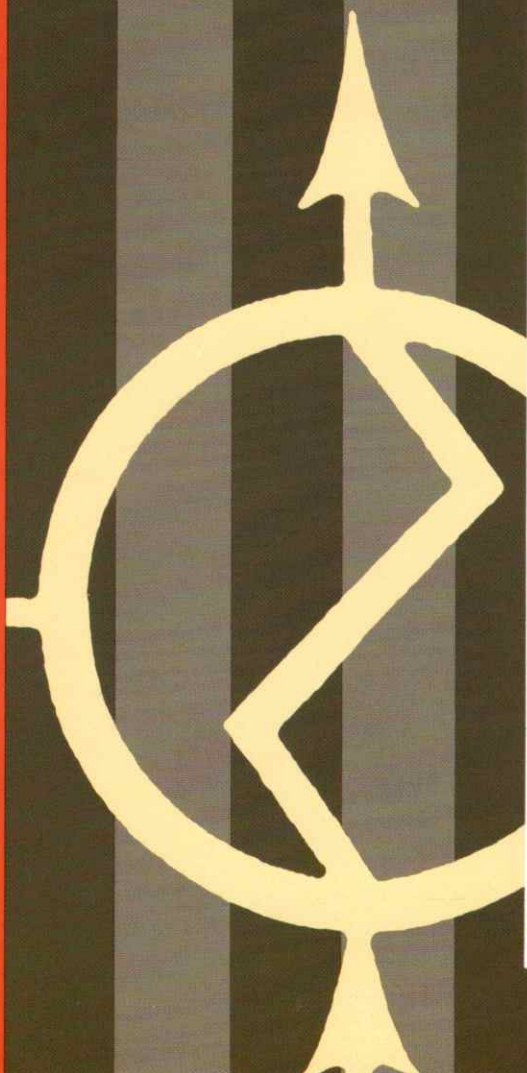
ARTISTS SQUARE



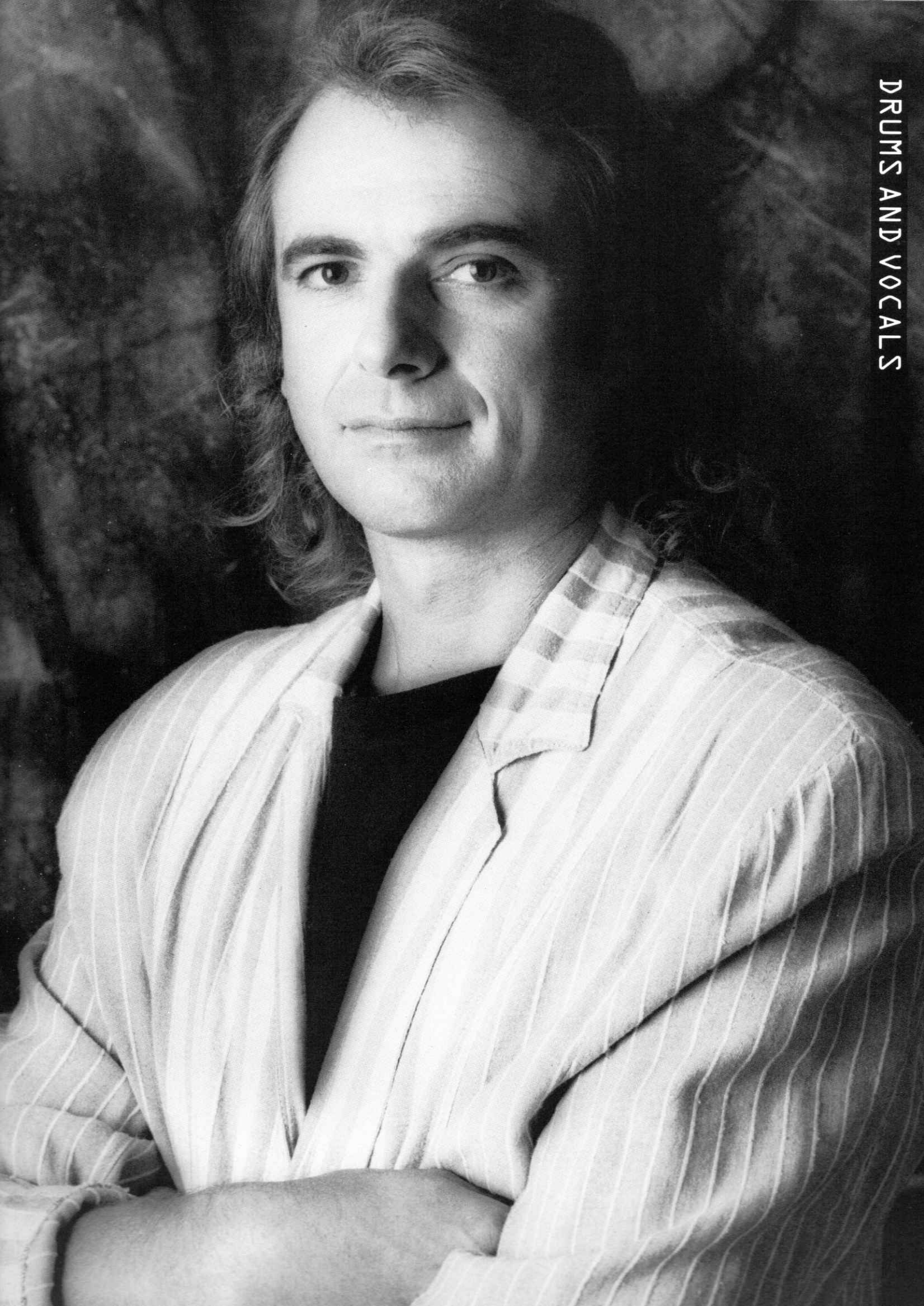


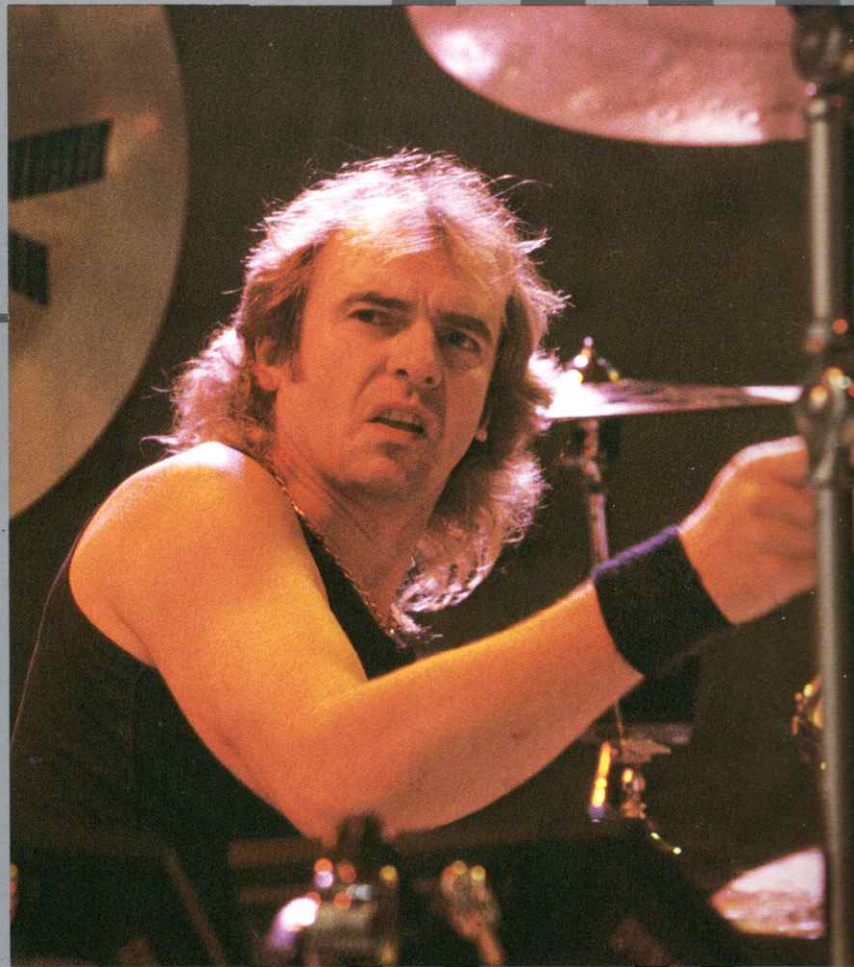
BASS GUITAR AND VOCALS

ALAN WORTHIE



DRUMS AND VOCALS







初めてイエスに会ったとき、僕はアトランティック・レコードのマイアミ支社代表と、レンタカーのフォード・ファルコンに乗っていた。ノース・フロリダにあるロリンズ・カレッジで、彼らのコンサートを見るためだった。デイトナビーチ空港で彼らを拾い、ホテルまで送り届けたのは、ほかならぬ僕たちだったし、僕は愛妻にカードを送りたいというジョン・アンダーソンに、1ドルを貸しさえした。リムジンもない。スイートルームもない。そこにあったのはみずばらしいホリデーインだけ。ギグのあと、彼らがノース・フロリダの安っぽい大衆食堂に入ったのは、午前1時だった。耳慣れないブリティッシュ・アクセントのために、僕には彼らの言っていることがまったくわからなかったが、ああ……彼らは素晴らしかった。

長年にわたって、僕は彼らの音楽の驚くべき発展を目の当たりにしてきた。それは、ある種の音楽をトレードマークとしながらも、決してそれに振り回されることのない発展の過程、イエスのヴィジョンを極点にまで高めるための道具としてテクノロジーを利用した、科学と感情の絶妙のバランスだ。

イエスのデビューは'60年代末。どちらかといえば、彼らはまだ世間を知らない若者で、ジェスロ・タルやE L Pといった同期のバンド同様、地元ロンドンのロック・クラブに出演していた。最初の2枚のアルバム『イエス・ファースト・アルバム』と『時間と言葉／イエスの世界』は、冒険的ではあるが粗削りで、売上げのほうはパツしなかったものの、彼らは一部の熱狂的なファンを得た。しかし、シンセサイザー以前の凝りに凝ったストリング・アレンジや、ビートルズの曲のサイケデリックなカバー・ヴァージョン、それに基本メロディをもとにヘッドフォンで聴くにふさわしい大作を創りあげるといふ生来のアレンジの才能、などが証明するように、イエスの手法の青写真は、このときすでに出来上がっていた。が、本当の意味で彼らの最初の転機となったのは、1970年に録音された『サード・アルバム』だろう。プロデューサーにエディ・オフォードを迎え、若くして早くも伝説のギタリストとなりつつあったスティーヴ・ハウを新メンバーとして得、非常にオリジナリティの高い一連の作品を収録した『サード・アルバム』によって、イエスは初めて真のスターダムというものを味わった。このアルバムはイギリスのチャートでナンバー1に輝き、のちにアメリカでもプラチナ・ディスクを獲得した。紛れもない成功だ。首尾は上々だった。当時、『サード・アルバム』は、精神性を重視してボディ・ミュージックの対極にマインド・ミュージックを置いた“テクニカラー・レコード”の典型だった。純粋にロックし、ロールしていた。10分近い曲がほとんどだったが、テレパシーを使っているかのようなメンバーの一体感と、息を飲むほど複雑でありながらメロディを損なうことのない構成を原動力として、見事な音楽に仕上がっていた。曲が長いには、長いだけの理由があったのだ。1972年には、その流れを汲む『こわれもの』がリリースされ、収録曲「ラウンドアバウト」がシングル・ヒットした。

常に前進を続ける彼らにとって、『こわれもの』は『サード・アルバム』の単なるコピーではなく、明らかにそれを一步押し進めたレコードだった。各メンバーがそれぞれに短めのソロを披露する一方、精確なプレイでオーケストラを彷彿させる彼らの離れ業を見せつけたのが、10分に及ぶ組曲「ハート・オブ・ザ・サンライズ」だ。「サウス・サイド・オブ・ザ・スカイ」では、ハード・ロック・シンフォニーとでもいったアプローチが見られる。総括すれば、彼らが本物のバンドであり、長く活躍を続ける——彼らなりに——だろうことを示したのが、このアルバムだった。

1973年、イエスは自由世界各国のスタジアムで、超満員の観客を集めてコンサートを行なった。粗っぽいなながらも熱のこもったかつのライブ・パフォーマンスは、洗練されたパワフルなものに変わり、アルバムの内容を忠実に再現するとともに、ライブの醍醐味を十分に感じさせた。そして『危機』のリリースにより、事態はさらに好転した。初期のイエスの本領が遺憾なく発揮されたアルバム。3つの音のつづれ織りが“蝶のごとく舞い、蜂のごとく刺し”た。

『危機』は、おそらくイエスの全アルバムの中で、もっとも聴き手を消耗させる作品だろう。どの曲も、クレッシェンドしてだんだん盛り上がり、聴き手を強力な音のローラーコースターに乗っているような気分させる。タイトル曲「危機」は、長さが20分もありながら、自己耽溺に陥らず、猛スピードのギター・ソロからのんびりとしたメロディックな間奏まで、信じがたいほどの鮮やかさで自在に変化して聴く者を飽きさせない、当時としては随一の曲だったと言える。それは美しい映画のような夢の世界だった。

『危機』に続いて発表されたのは、好評を博した3枚組のライブ・アルバム『イエスソングス』だ。このレコードは、“出来のいい”作品だと評価されはしたものの、ファンの間では、彼らのライブの魅力はレコードに収めきれものではない、という見方が一般的だった。'70年代のオーディオ・テクノロジーを今日のそれと比べれば、この意見は正しかったと思われる。しかし、この『イエスソングス』をきっかけとして、彼らは次の段階へ進むことになったのだ。イエスは、最初の2枚のアルバムで独自の手法を開発し、続く3枚のスタジオ録音盤でバンドの真髓を堂々と誇示してみせたが、次の新たな試みは、多くのファンを少しばかり混乱させた。それが、4面に各1曲を収録したアルバム『海洋地形学の物語』だ。このレコードは、ロックン・ロール・メディアの一部の人々に、“いくらなんでもこれはやりすぎだ”と発言する絶好の機会を与えた。こうした連中は、バンドの能力を羨んでのことか、単にイエスのスタイルについていけなかったのか知らないが、イエスは精確さや科学に走りすぎていると考えていたのだ。彼らはハゲタカのように襲いかかり、“過度に冒険的な”このプロジェクトを非難した。けれども、イエスのファンは彼らを裏切らず、いつも大挙してコンサートに詰めかけた。『海洋地形学の物語』に魅力がなかったというわけではない。ただ残念なことに、支持者の困惑を解いて膨大なセールスを上げるには、多少魅力不足だったということだ。レコード会社でさえ、20分もある曲ばかりを並べたアルバムをどう扱っていいかわからずに困惑した。ことに、ラジオ局が保守的な姿勢に移行し、短めでありきたりの曲を好んでかけるようになっていたからだ。このアルバムは、バンド自体にもまた犠牲を余儀なくさせた。過去数年、ツアー、アルバム、ツアー、というサイクルで休みなく働いてきたための疲労、音楽業界の反応が鈍かったことから来るフラストレーション、通常でないアルバムの性質から生じたバンド内の音楽上の軋轢、などがそれだった。

彼らは、今度はキーボードにパトリック・モラーツを加え、クリス・スクワイアのスタジオに再結集して、『リレイヤー』のレコーディングを行なった。これはイエス・ファンにとっては好き嫌いの分かれるアルバムだ。たとえば「サウンド・チェイサー」ではイエスはジャズ・ロックの分野に踏み込んでいる。B面の「ゲイツ・オブ・デリリアム」は、トルストイの『戦争と平和』を音楽的に解釈したもので、「スーン」の部分ではジョン・アンダーソンのたいそう官能的な歌声が聴ける。ジョン・アンダーソンは後年、『リレイヤー』のころは、次にどんなステップへ進むかということに関して、メンバー同士が対立していた、と述べている。『リレイヤー』が『海洋地形学の物語』の副産物だったとしても、'70年代半ば、イエスの人気に影響がさしていた時期にあっては、これは比較的受けのよいレコードだった。昔からのファンに言わせれば、このアルバムは現在までのイエスの代表作の1つに数えられる。

'70年代後半に入ると、彼らは再び体勢を立て直し、新たな転機となる『イェスタデイズ』をリリースした。既発表曲に、アンダーソン／スクワイアのペンによる「ディア・ファーザー」のアメリカ未発表ヴァージョンを加えたコンピレーション・アルバムだ。筋金入りのファンが喜んだのはもちろんだが、イエスが『究極／ゴーイング・フォー・ザ・ワン』の発表によって突入することになる新しい時代の幕開けを告げたという点に、この編集盤の真の意味があった。『究極』は、イエスがコンセプトの面でルーツに立ち返ったアルバムだ。従来のスタイルを踏まえた大作「アウェイクン」を、ジョン・アン

ダーソンは「ユアーズ・イズ・ノー・ディグレイス」の精神を継承するものと言っているが、このアルバムには短めでより率直な曲も収められた。「アイヴ・シーン・オール・グッド・ピープル」を思わせる「ワンダラス・ストーリーズ」はヨーロッパでシングル・ヒットしたし、「究極」はイエスには珍らしく、ストレートでノリのいいハード・ロックである。必ずしも革命的とは言えないにせよ、イエスはこのアルバムで本来の手法を改めて確立させた。冒険的で、メロディックで、満足のいく作品だ。『海洋地形学の物語』と『リレイヤー』で地球上を旅しつづけたバンドが、ようやく帰るべきところに帰り着いた、という感があった。

1978年には、「究極」の子供とも言うべき『トーマト』が発表された。いくぶんコズミックな「サイレント・ウィングス・オブ・フリーダム」から荒々しい「リリース・リリース」まで、幅広いタイプの曲が収められていたが、あまり印象の強いアルバムとは言いがたい。ツアーは引き続き盛況で、イエスには堅実かつ忠実な多数のファンがついていた。ところが、ここへ来て彼らは立て続けに悪運に見舞われた。まず、パリでのレコーディング・セッションが不毛に終わったこと。次に、ジョン・アンダーソンと同じくオリジナル・メンバーであり、脱退と再加入を繰り返していたキーボード・プレイヤーのリック・ウェイクマンが、突然バンドを離れたこと。創作活動のコントロールから全般的な方向性、マネージメントの問題に至るまで、ありとあらゆるプレッシャーが重くのしかかり、彼らはツアーもレコーディングもできない状態で、不意にすべてがストップしてしまった。もはやこれまでかと思われた。レコード業界にはありがちなこうしたパニックの中で、のちに敏腕プロデューサーとなるトレヴァー・ホーンと、マルチ・キーボーディストのジェフ・ダウンズの2人から成るバグルスが、イエスに吸収合併された。破滅は目前に迫っていた。彼らはわらをもつかむ思いで、かつてのプロデューサー、エディ・オフォードを再び起用した。が、以前のようなわけにはいかず、この試みは失敗に終わった。このときのアルバム『ドラマ』は、悪くはないが、何かが欠けていた。メンバー間の相互作用がまるでなかったのだ。ツアー終了後、もろもろの実際的な問題を度外視して、彼らは解散を決めた。ファンにとってはこれほどのショックはなかったろう。

ロックン・ロールの世界ではおかしなことがあるもので、当時はちっともおかしくなかったのだが、後になって思えば、イエスにとってもファンにとっても、解散は最良の手立てだったようだ。誰もがよくよく考えたうえで、「帰るべき場所」がどこであるかを悟ったということだ。第一線で彼らを支持していた人たちにとっては困難な時期だったろうが、まもなくアラン・ホワイトとクリス・スクワイアが改めてチームを組むと、そこに新たな可能性の芽ばえを見てとった抜け目ない業界の大物が、非常に注目されてはいたが、まだ著名に近い（少なくともアメリカでは）ギタリスト、トレヴァー・ラビンを2人に紹介した。トレヴァーは数年来、やり手のA&Rマンたちの人気を集め、たびたびギタリストの口を世話してもらっていたが、イエスにとっては幸いなことに、どれもうまく運ばなかったという経歴を持つ。だが今度ばかりは、性格の面でもプロとしての技量の面でも、彼はまさしくイエスに打ってつけの人材だった。トレヴァーは素晴らしく器用で野心的なギター・プレイヤーで、イエスの代表曲をすべて難なく弾きこなしたうえで、山ほどのアイデアを持ち、エネルギーに満ちていた。彼がたちまちのうちに、イエスの音楽に非イエス的な考え方を持ち込み、イエスがそれを土台にして次の段階へ進むことになったのは、特筆すべきだろう。

彼らは数ヶ月にわたってセッションと話し合いを重ねた。忘れかけていたあの胸躍るような感覚が、次第に膨れあがっていった。キーボード・プレイヤーをどうするか？ ウェイクマンはもう問題外。パトリック・モラーツは今ひとつしっくりこなかった。ジェフ・ダウンズはエイジアに加入している。と、そこで思い当たったのが……トニー・ケイだ！ イエスの創始者の1人で、その後デヴィッド・ボウイらのもとで腕に磨きをかけ、新たな冒険に乗り出すだけの意

欲を持っている男——彼は条件を完璧に満たしていた。こうして彼らは再出発した。ただし「イエス」ではなく、イエスと同じ意図を持つバンド「シネマ」として。

ちょっと待て……何かが足りない。彼らは自分をごまかすのをやめ、正直に「ジョン・アンダーソンを呼び戻そう」と態度を決めた。電話一本でOK、というようなわけには行かなかったが、すっかりやる気を取り戻したメンバーたちは、さまざまな問題を徹底的に論じ合い、デビュー当初を思わせる真摯さと若々しいアイデアとをもって、彼らが一度歩みを止めた場所から新たなスタートを切るまでに漕ぎつけたのだ。

それがシネマではなく、紛れもないイエスだということに気づくのに、そう時間はかからなかった。しかし、それは何としても一花咲かせてやろうという決意に燃える、生まれ変わったイエスだった。

5つの個性がぴたりと噛み合った。クリス・スクワイアのメロディックなベース、アラン・ホワイトの精密なファンク、トニー・ケイの豊かに流れるようなサウンド（よくある過剰キーボードではなく）、ジョン・アンダーソンの飛翔する官能的なヴォーカル、そしてトレヴァー・ラビンは、イエスの冒険精神とロックン・ロールの技巧を隔合せた。彼らは自らの能力を堅く信じ、そればかりかはっきりとした未来像を描いていた。歳を取った分だけ賢明になり、それと同時にメンバー同士がよりよい形で調和するようになったのだ。そう、相変わらず頑固なクリスに、相変わらず謎めいたところのあるジョン、たくましいアラン、テクニカルなトニー、行動家でありバンドのコーディネーターであるトレヴァー。こうして彼らはニュー・アルバムのレコーディングに入った。アイデアと活力に満ち溢れた新生イエスに力を貸したのは、かつての彼らの僚友であり、今はプロデュースの魔術師としてその名を馳せるトレヴァー・ホーンだ。セッションは長く、骨の折れる作業で、誰もが神経質になり、衝突が絶えなかったが、イエスは今回は道を切り拓き、リリースされたアルバム『ロンリー・ハート』は、デビュー以来最高のセールスを記録したばかりか、昔からのファンを狂喜させ、若い世代の新しいイエス信奉者をも獲得することになったのである。新たに契約したマネージメントや、彼らに再び触発されたレコード会社とスクラムを組み、みんなをあとと言わせたいという誠実な願いを胸に、彼らは1984年、ツアーを再開した。バンド自体がそうだったように、ツアーもまた見事にバランスの取れたもので、演奏曲目は新旧を取り混ぜ、懐かしい名曲を充実したニュー・ヴァージョンで聴かせる一方、評判の新曲を熱情的にプレイして観衆を魅了した。イエスはここに蘇ったのだ！

イエスの最新作『ビッグ・ジェネレーター』も、彼らの文句のつけようのないさらなる発展を示すものだ。このアルバムもまた、脱帽ものの高水準とコントロールされた奇抜さで、リスナーを挑発している。

忘れてならないのは、音楽における冒険の精神を大切にし、ひたすらそれを突きつめてきたイエスが、ほかのバンドに強烈なインスピレーションを与えていることだ。目を開けて聴こうと閉じて聴こうと、3Dテクニカラーのイエス・サウンドは、確かに生命を持って呼吸している。レコード業界がファッションとダンスを中心に回る、この薄っぺらな時代にあっても、イエスはその伝統と進歩的な斬新さとの釣合いを保ちつづける。

すべての偉大なバンド同様、イエスとて問題を抱えていないわけではない。時にはエゴのぶつかり合いもあって当然だし、意見が対立することも、音がかち合うこともあろう。しかし、生まれ変わった現在のイエスは、今までとは違う。何があろうと、彼らは正当な存在理由をもって、活躍を続けていくことだろう。

